

# コミュニケーション不安とシャイネスとの関係性について

笠原正秀\*

## Abstract

The purpose of this article is to examine the relations between communication apprehension: CA and shyness as a personality trait. In order to establish this relationship, Personal Report of Communication Apprehension: PRCA-24 (McCroskey, 1997b) was used for measuring CA, and Revised Shyness Scale (Imai & Oshimi, 1987) was applied for measuring shyness. Throughout this research, the tendencies of CA and shyness among Japanese were confirmed, and the degree of correlation between CA and shyness was clarified. Some sexual/gender differences were found in correlation between CA and shyness. Specific numerical figures are shown in the article.

## 1. 本研究の目的

本研究は、コミュニケーション不安 (Communication Apprehension、以下 CA と記す) とシャイネス (Shyness) との関係性を探ることを目的とし、質問紙による調査を行い、その結果に分析を加えたものである。日本人が高値の CA を示すことについては、多くの先行研究により指摘されている点である (e.g. Klopff & Cambra, 1979; McCroskey, GudyKunst & Nishida, 1985; 西田, 1988; 豊川, 1992; Klopff, 1997 等)。しかしながら、その原因を追究する研究はこれまであまり見られず、各先行研究の議論において仮説の形で取り上げられるにとどまっていた。菅原 (2002) も、なぜ日本人はこれほどまでに対人コミュニケーション場面に高い不安意識を持つのか、これまでの研究では十分な説明がなされているとは言えないと指摘している。本研究では、そうした日本人の示す高値の CA の原因の1つをパーソナリティ特性としてのシャイネスに求め、両者に見られる関係性を明らかにすることを目的とするものである。

## 2. 先行研究を踏まえての概念と仮説の提示

### 2-1 CA

CA という概念は、McCroskey (1970) により初めてスピーチ・コミュニケーションの分野

に導入されたものである。当初は、スピーチ場面に特化したものであったが、その他の口頭での対人コミュニケーション場面を網羅し、改訂を繰り返し、最終的に Personal Report of Communication Apprehension: PRCA-24<sup>1</sup>（以下、PRCA-24 と記す）（McCroskey, 1997b）に到った。

McCroskey (1997a) によれば、CA は以下のように定義されている。“an individual's level of fear or anxiety associated with either real or anticipated communication with another person or persons” (p. 82) [「実際の、あるいは想像上の対人コミュニケーションに関連した恐怖あるいは不安のレベル」(近藤訳, 1996, p. 9)]。つまり、実際に対人コミュニケーションを行っているときだけでなく、そうした場面や状況を考えただけでも生じるものであることを示している。

こうした不安・懸念 (apprehension) 測定に関する調査用紙には、実に様々なものが開発されている (e.g. Daly & Miller, 1975; Andersen, Andersen, & Garrison, 1978; McCroskey & Richmond, 1982 等)<sup>2</sup>。本研究では、対人コミュニケーション、特に口頭での言語によるコミュニケーション場面を主眼にしているため、PRCA-24 を採用した。

PRCA-24 は、各項目間の信頼性が高く、ほとんどの研究において .90 以上の相関を示している (Leary, 1983 [リアリィ, 1998])。これは基準の妥当性も十分に証明されているものといえる。本調査においても、高い内的整合性を示しており、信憑性の高い質問紙といえる<sup>3</sup>。こうした信憑性の高さから PRCA-24 を利用した調査報告は多々あり、その中でも特に日本人の CA 値の高さについては、数多くの報告がなされている (e.g. Klopff & Cambra, 1979; McCroskey, Gudykunst & Nishida, 1985; 西田, 1988; 豊川, 1992; Klopff, 1997 等)。本調査においても、これまでの調査報告同様、高い CA 値が示されるものと推測される。

## 2-2 シャイネス

シャイネスには実に様々な定義がなされており、1 つにまとめることのできない概念である。シャイネス研究の第一人者であるジンバルドー [Zimbardo, P., G.] ですらシャイネスに対して “shyness is a fuzzy concept” (Zimbardo, 1977, p. 13) [「シャイネスはあいまいな概念である」] (拙訳) と記している。また、バス (1997) [Buss, 1986] は「一人または何人かの人といっしょにいる時、普通は会話中に、当然に期待される対人行動が抑制されることである」(p. 190) と行動レベルでの定義を記している一方で、「他者と一緒にいる際の緊張、決まりの悪さや不快な感じ、あるいは対人行動の抑制」(p. 193) という主観的経験のレベルを含めての定義もみられる。こうした点を見ても、シャイネスには実に幅広い概念が含まれていることがわかる。

このように様々な角度から考えることのできるシャイネスには、Zimbardo (1977) の研究以来、数多くの研究がなされてきている (Jones, Briggs & Cheek, 1986)。そうした先行研究の中に共通して見られるシャイな人の大きな特徴は、対人関係における消極性である。こう

した消極的な態度に対して、“Shyness can be a mental handicap as crippling as the most severe of physical handicaps, and its consequences can be devastating” (Zimbardo, 1977, p. 12) [「シャイネスは最も深刻な身体的ハンディキャップと同じくらい深刻な心理的ハンディキャップであり、将来に深刻な影響をもたらす」] (拙訳) と記されている。これは、シャイであることに対する欧米文化（特に北米文化）の否定的な評価と見ることができる。それに対して日本人あるいは日本文化におけるシャイであることに対する評価はどうであろうか。きわめて対照的とは言えないだろうか。

コミュニケーション場面における不安や懸念の個人差は、シャイネスに関連するものが多い(菅原, 2002)。こうした指摘からもシャイネスとCAとの間に強い関係性を想定することができる。シャイネスの自己評価尺度には、これまで多くの種類のものが提示されている；e.g. 対人寡黙尺度 (Jones & Russel, 1982)、シャイネス尺度 (Cheek & Buss, 1981)、対人的回避と苦悩尺度 (Watson & Friend, 1969)、対人不安傾向尺度 (Leary, 1983)、日本語版シャイネス尺度として、今井・押見 (1987)、相川 (1991) など。これらのシャイネス尺度は、対人関係における消極的な行動と回避的な行動の両方が含まれたものになっている。

本調査では、シャイネスの測定に今井と押見 (1987) を採用した。今井と押見 (1987) は、Cheek & Buss (1981) の尺度から 10 項目、Watson & Friend (1969) の尺度から 6 項目、Jones & Briggs (1986) の尺度から 5 項目、Morris (1984) の尺度から 3 項目、Leary (1983) の尺度から 2 項目の計 5 種類のシャイネス尺度を構成し直し、26 項目からなる日本語版シャイネス尺度を作成している<sup>4</sup>。回答形式は 5 件法 (1 : まったくあてはまらない～5 : よくあてはまる) で作成されている。これまでの先行研究で用いられた各シャイネス尺度の中から

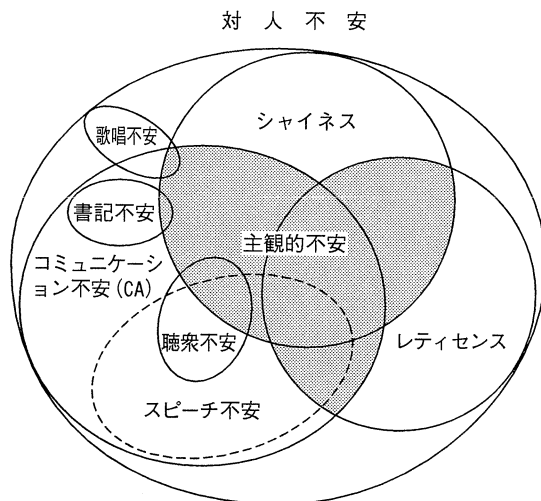


Figure 1. コミュニケーション回避にかかわる不安概念間の関係 (p.497)

質問項目を厳選し、内的整合性及び他のパーソナリティ尺度との相関の高さ等の検証<sup>5</sup>も十分になされていると判断したため、今井と押見（1987）のシャイネス尺度を採用した。

Richmond & McCroskey (1998) は、シャイネスと CA を対比させる形で以下のように記している：“Shyness is the behavior of withdrawing from communication or avoiding it, while communication apprehension is the fear of communicating, which causes shy behavior” (p. 37)。また、坂本・プリブルとキートン（1998）は、コミュニケーション回避に係わる不安概念間の関係を、Figure 1 のようなモデルで示しているので提示しておきたい。こうした指摘を踏まえ、シャイネスと CA の間には高い相関が示されるものと予想される。

### 3. 調査方法

#### 3-1 協力者

本調査に協力してくれたのは、計 550 人（男性 118 人：全体の 21.5%、女性 432 人：全体の 78.5%）の東海圏（愛知県 2 校、静岡県 1 校）にある 3 大学（私立）の学部生と大学院生である。年齢幅は、18 才から 65 才（全体：18-65、男性：19-25、女性：18-65）であった（全体： $M=20.40$ 、 $SD=2.245$ 、 $Mo=20$ 、男性： $M=20.79$ 、 $SD=.904$ 、 $Mo=20$ 、女性： $M=20.29$ 、 $SD=2.479$ 、 $Mo=20$ ）。

#### 3-2 手順

質問紙の配布は、愛知県内の 2 大学については調査者の授業を通して配布および依頼を行った。静岡県内の 1 大学については、本学部非常勤講師の Na 氏と当該大学が本務校である Ni 教授の担当する授業で実施していただいた。3 大学とも協力者はあくまでも自主的な参加であり、調査用紙の提出について何ら強制力を持たせるような条件は一切設けることなく実施した（質問紙にもその旨を明記）。つまり、調査用紙の回答から提出に至るまですべて協力者が自主的に行ったものである。

#### 3-3 使用調査用紙とデータ処理

本調査において、CA の測定に関しては、2-1 にも記されているように信憑性の高さから PRCA-24 の翻訳版（近藤、1996）を採用した。また、シャイネスの測定には、2-2 に記されているように今井と押見（1987）のシャイネス尺度を採用した。

収集したデータは、SPSS 13.0J for windows を用いて統計的に処理を行い、平均値を求め、 $F$  検定、 $t$  検定を行い有意を検証した。また、各変数間の相関を調べるために、ピアソン積率相関係数（以下、 $r$  と記す）<sup>6</sup> を求め、それぞれの標準偏差（ $SD$ ）も求めた。 $F$  検定、 $t$  検定、

$r$  に関しては、両側検定による有意確率 ( $p$ ) も求めた。

## 4. 結果および発見

### 4-1 CA 測定結果

本調査において、CA の各下位尺度<sup>7</sup> および総点は以下のような数値が示された。小集団内での議論や討論 18.91 (男性 18.14、女性 19.13)、集会や授業での発言 19.62 (男性 18.69、女性 19.88)、一対一の会話 17.40 (男性 17.63、女性 17.34)、スピーチ 20.12 (男性 19.02、女性 20.42)、CA 総計 76.05 (男性 73.47、女性 76.76) であった ( $N=550$ : 男性 118 人、女性 432 人)。これまでの先行研究の結果と同様、スピーチ場面、集会や授業での発言場面、小集団内での議論や討論の場面、一対一の会話場面の順に高い数値が示された。これはコミュニケーション場面における個人への注視の程度が大きい順に高い数値が示されていると解釈できる。つまり、一対一のコミュニケーション場面よりも一対多の関係が生じる場面に対して、より強く CA を感じるといえる。

また、一対一の会話場面を除いたその他のすべての場面において、男性よりも女性の方が高い数値を示した。この点についてもこれまでの先行研究と同様の傾向がみられるが、本稿発表段階では収集したデータが女性の人数に比べ、男性の人数が限られていたこともあり、その平均値に有意な差があるかを検証するため、 $F$  検定および  $t$  検定を行ったが、有意な差は確認されなかった ( $p > .05$ ,  $n.s.$ )。これらを表化したものが Table 1 である。

この結果を McCroskey (1997b) に従い 80 以上を高 CA と見た場合、227 人 (男性 41 人、女性 186 人) が該当した。調査協力者全体の 41.27% (男性 34.74%、女性 43.05%) であった。また、Klopf (1997) に従い 70 以上を高 CA とした場合、368 人 (男性 76 人、女性 292 人) が該当した。調査協力者全体の 66.90% (男性 64.40%、女性 67.59%) であった。いずれにしても、非常に高い比率で両者の示す高 CA の範囲内に含まれており、これまでの先行

Table 1. PRCA-24 集計結果

CA 各尺度 調査協力者	小集団内での 議論・討論	集会や授業で の発言	一対一の会話	大勢の人の前 でのスピーチ	CA 総合
男 性	18.14	18.69	17.63	19.02	73.47
SD	5.414	5.318	4.741	5.230	17.62
女 性	19.13	19.88	17.34	20.42	76.76
SD	5.085	5.140	4.635	5.792	16.51
全 体	18.91	19.62	17.40	20.12	76.06
SD	5.168	5.197	4.655	5.700	16.80
$F$ 値	.042	.000	.069	2.269	.038
$t$ 値	- 1.847	- 2.214	.598	- 2.382	- 1.893

( $N=550$ : 男性  $n=118$ 、女性  $n=432$ 、 $df=548$ )

研究を支持する結果であった。

いかに日本人が口頭におけるコミュニケーションやそうしたコミュニケーション場面に対して不安感や懸念を抱いているかがうかがえる結果であった。これまでの先行研究と比較してみても傾向としては何ら大きな変化はみられなかった。

4-2 シャイネス測定結果

シャイネスに関しては以下のような数値を得た。シャイネス全体では  $M=75.27$  ( $SD=15.53$ )、男性は  $M=76.69$  ( $SD=15.85$ )、女性は  $M=74.88$  ( $SD=15.44$ ) であった。この数値は、今井と押見 (1987) に極めて近い数値であった (巻末注 4 参照)。その意味では、本調査で収集したデータは信頼のおけるものであり、同時に使用した今井と押見 (1987) の日本語版シャイネス尺度についても信憑性の高いものであることが示されたといえる。

Table 2 に示されているように、シャイネスについては女性よりも男性の方が高い数値を示しており、一見、女性と比べて男性の方がシャイであるとみることができそうであるが、この男女間にみられる得点差は有意といえるのかを検証するため、 $F$  検定と  $t$  検定を行った。しかし、有意な差は確認されなかった ( $p > .05, n.s.$ )。

Zimbardo (1977) に次のような記述がみられる。

More women are shy than men, right ? Wrong ! Another false generalization, probably based on observations that men tend to be more assertive, aggressive, and obvious in social encounters. Our information indicates no difference between the sexes in prevalence of shyness. (p. 16)

つまり、女性の方がシャイなのではないかと思ってしまいがちであるが、これは男性がコミュニケーション場面で主張的かつ攻撃的で、物事にはっきりとしていることからそうした誤った先入観を持ってしまいがちであるが、実は性差は確認されていないというわけである。今回の結果も上述のように、男性の方が女性より高い数値を示しており、女性の方がシャイ

Table 2. シャイネス集計結果

調査協力者	シャイネス	SD
男 性	76.69	15.84
女 性	74.88	15.44
全 体	75.27	15.53
$F$ 値	.020	
$t$ 値	1.117	

( $N= 550$ :男性 = 118、女性 = 432、 $df= 548$ )

なのではないか？ という誤った一般化を覆すものとなっている。また、今回の結果から、男性の方がシャイなのか？ という疑問に対しては、検定の結果、有意な差は確認されなかった。

## 5. 議論および分析

### 5-1 CA とシャイネスとの関係性について—包括的な視点から—

本項では、研究の主題でもある CA とシャイネスとの相関を 4-1 と 4-2 で求めた結果をもとに双方の  $r$  の算出を行い、議論および分析を行う。

CA 総計とシャイネスとの間には  $r = .282$  という数値が確認された。両者の間には弱い正の相関があると見ることができる。Figure 2 に示されているように、シャイネス（縦軸）と CA（横軸）の両者間にみられる分散は比較的きれいな正の相関を示す形状となっている。つまり、シャイネスの程度が高いほど CA を感じる程度も高いといえる。

次に、CA の各下位尺度とシャイネスとの関係を見てみると（Table 3、Figure 3 参照）、シャイネスと最も高い  $r$  が示されたのは、CA 値の最も低かった一対一の会話場面であった（ $r = .301$ ）。両者の間には弱い正の相関があると判断することができる。また 1% 水準で有意（両側）であることも確認された。コミュニケーション行動に対する不安感が最も低いはずの一対一の会話場面であっても、シャイネス傾向のある者にとっては内気さや内向的な気持ちが最も反映され易い場面と解釈することができる。

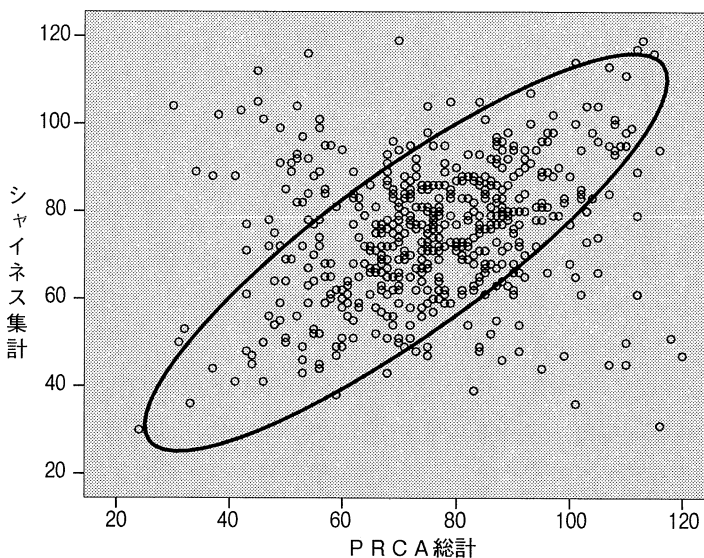


Figure 2. シャイネスと CA 総計の相関分散図（男女総計）

Table 3. CA とシャイネスとの相関 ( $r$ )

CA 各尺度 シャイネス	小集団内での 議論・討論	集会や授業で の発言	一对一の会話	スピーチ	CA 総合
男 性	-.057	.023	-.015	.144	.028
女 性	.311**	.255**	.390**	.227**	.364**
全 体	.222**	.197**	.301**	.204**	.282**

\*\*は、 $r$ が1%水準で有意（両側）であることを示している。（ $N = 550$ ：男性 = 118、女性 = 432）

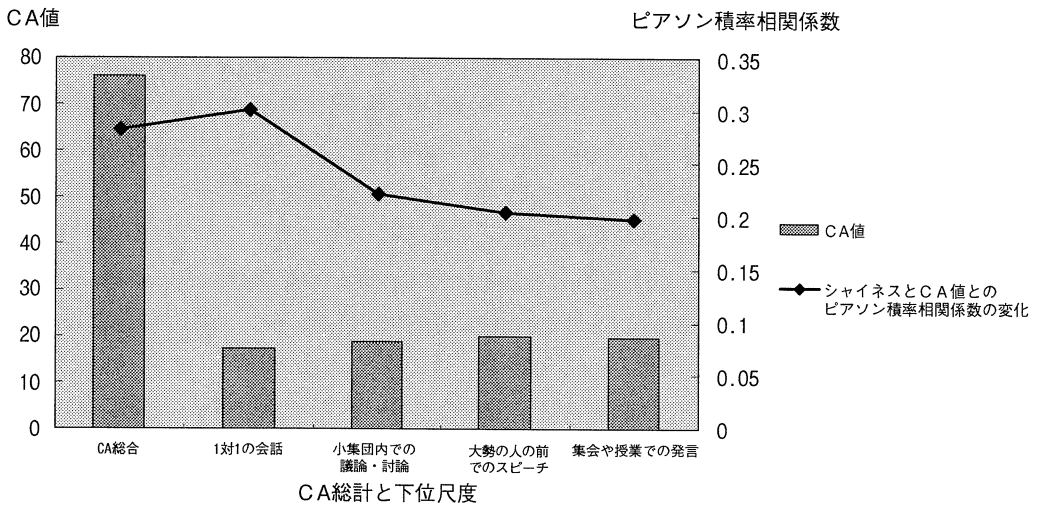


Figure 3. シャイネスと各 CA 値との相関変化 (全体)

2 番目に高い相関が示されたのは、小集団内での議論や討論の場面であった ( $r = .222$ )。ここでも前出の一对一の会話場面と同様の議論が展開できる。小集団内での議論や討論の場面は CA 値としては 2 番目に低い数値であった。つまり、コミュニケーション行動に対する不安感 は 2 番目に低い場面のはずである。しかし、シャイネスとの間に弱い正の相関が確認されている。こうした点から、シャイネス傾向のある者は、大勢の人々を対象とするような場面よりも、少人数でより密度の濃いコミュニケーションが求められるような場面の方にその傾向が表れ易いとみることができる。

次に高い相関が示されたのは、大勢の人を前にしてのスピーチの場面であった ( $r = .204$ )。弱い正の相関が確認された。大勢の人を前にしてのスピーチ場面というのは、最も高い CA 値を示した場面であるが、シャイネスとの相関は 3 番目（下から 2 番目）であった。この結果はこれまでの議論が崩されるものでもある。これまでの議論の流れからすれば、大勢の人を前にしてのスピーチ場面は最もシャイネスとの相関が低くあらねばならないはずである。しかし、3 番目（下から 2 番目）の高さであり、しかも有意であることが確認されている。



この点については、今後の研究課題としたい。

最後に、最も相関が低かったのは、集会や授業での発言の場面であった ( $r = .197$ )。微弱な正の相関が示された。前出の大勢の人を前にしてのスピーチ場面同様、疑問の残る結果である。 $r$ は前出の大勢の人を前にしてのスピーチと極めて近い数値ではあるが、有意であることが確認されている。この点についても今後の研究課題としたい。

以上のように、大勢の人の前でのスピーチ場面と集会や授業での発言場面には若干の矛盾がみられるので議論の余地は十分にあるが、シャイネスはコミュニケーション場面における対象者数よりも、むしろそこに期待されるコミュニケーションの密度の濃さが関係しているのではないかと考えられる。つまり、シャイな傾向のある人は、個人対個人がお互いに関与し合いながら関係性を構築していかなければならないような密度の濃いコミュニケーションの展開が期待される場面であればあるほど不安感を持ち、しり込みをしてしまう傾向があると考えられる。

## 5-2 CA とシャイネスとの関係性について—性差の視点から—

本項では、本研究の主題でもある CA とシャイネスとの相関を、男性と女性との性差の観点から議論および分析を行う。男性と女性、それぞれの CA とシャイネスとの相関を 5-1 で示した結果をもとに分散図を作成した (Figure 4、Figure 6 参照)。

男性の場合、CA 総計とシャイネスとの相関は  $r = .028$  であり、ほぼ無相関といえる。Figure 4 の分散図もその点のうかがえるものとなっている。しかし、こうした結果が出た原因として、男性データ数の少なさが一因と考えている。今回の調査に関しては、上述のよう

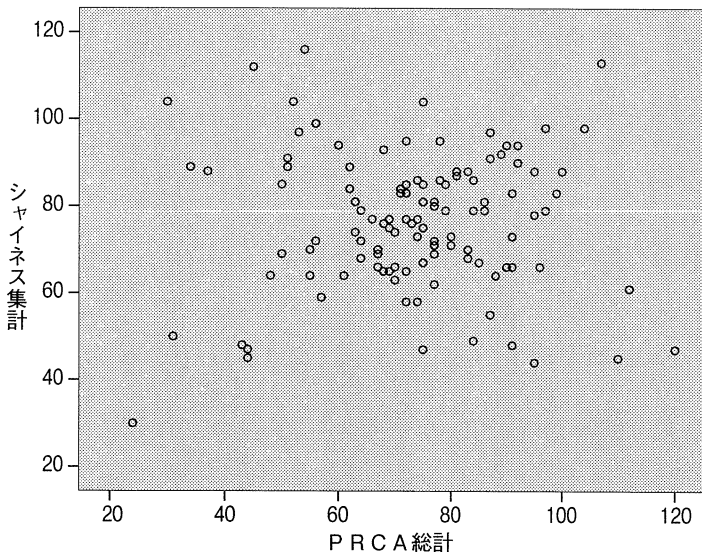


Figure 4. シャイネスと CA 総計の相関分散図 (男性)

な数値が示されているため無相関と判断せざるを得ないが、今後、男性データ数を増やすことにより、両者の相関がどのように変化してくるのを見極めたいと考えている。现阶段では希望的推測でしかないが、Richmond & McCroskey (1998) の定義のように、シャイネスと CA との間には関係性があるべきという前提で考えている。

男性の CA の各下位尺度とシャイネスとの相関を見てみると (Table 3、Figure 5 参照)、両者の間に最も高い相関がみられたのは、大勢の人の前でのスピーチ場面であった ( $r = .144$ )。しかし、これも無相関であった。以下、各コミュニケーション場面のすべてにおいて無相関と示された。以下、 $r$  の高い順に、小集団内での議論や討論の場面は  $r = -.057$ 、集会や授業での発言場面は  $r = .023$ 、一対一の会話場面は  $r = -.015$  であった。以上のように、すべての下位尺度において無相関が示された。

全体的に相関が確認されなかった要因の 1 つとして、男性データ数の不足は十分に考慮しなければならない点と思われるが、もう 1 点、小集団内での議論や討論と一対一の会話の 2 場面において、数値的には無相関ではあるものの、負の  $r$  が示されたことについても議論の余地があると思われる。また、男性データの全体にわたり女性と明らかに異なる数値が示されたことについては、自己意識との関係性が大いに考えられるところである。

今井と押見 (1987) によれば、シャイネスと公的自己意識とはごく弱い正の相関 ( $r = .16$ ) が示されているが、私的自己意識とは無相関であることが示されている (注 5 参照)。笠原 (2006) において、公的自己意識については男性 32.4 に対して女性 34.5、私的自己意識については男性 29.8 に対して女性 28.4 という数値が示されている。そして、公的自己意識・私的自己意識の双方とも男性と女性の両者に有意な差が確認されている (公的自己意識については  $p < .01$ 、私的自己意識については  $p < .05$ )。つまり、女性は公的自己意識を強く持ち、男性は私的自己意識を強く持つということが示されている。こうした自己意識の違いが、女

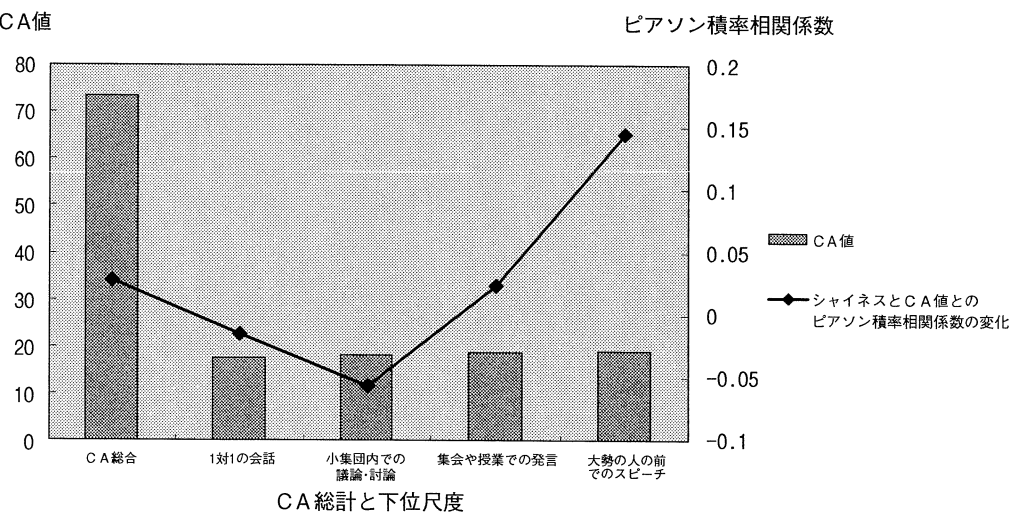


Figure 5. シャイネスと各 CA 値との相関変化 (男性)

性の示す CA とシャイネスとの相関パターンと男性の示す CA とシャイネスとの相関パターンの違いを生じさせているものと考え。今回、男性の CA の下位尺度とシャイネスとの間に見られた負の相関もそうした自己意識の違いが原因の 1 つと考えられる。

女性の場合、CA 総計とシャイネスとの間に弱い正の相関が示された ( $r = .364$ )。Figure 6 の分散図を見ても比較的美しい相関であることがうかがえるものとなっている。

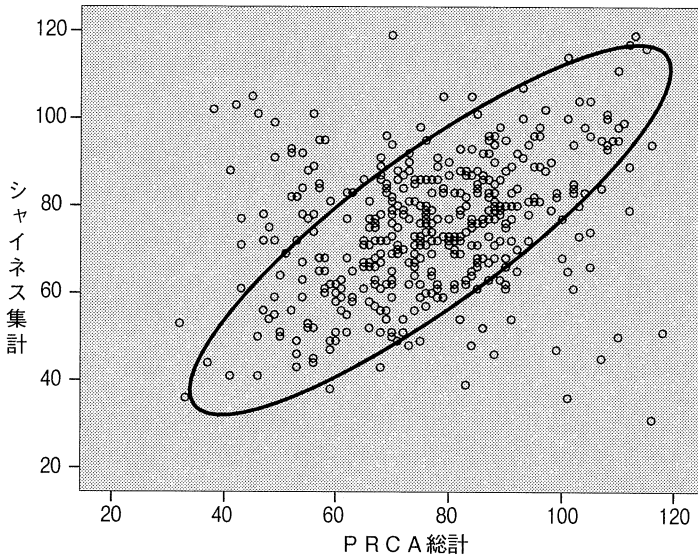


Figure 6. シャイネスと CA 総計の相関分散図 (女性)

女性の CA の下位尺度とシャイネスとの相関を見てみると、以下のような順序で相関の強さが変化している (Table 3、Figure 7 参照)。シャイネスと最も高い相関を示した CA の下位尺度は、一対一の会話場面であった ( $r = .390$ )。弱い相関と比較的強い相関の境界にあたる数値であった。2 番目に高い相関を示したのは、小集団内での議論や討論の場面であった ( $r = .311$ )。低い正の相関が確認された。次に高い相関を示したのは、集会や授業での発言場面であった ( $r = .255$ )。低い正の相関が確認された。最後に、最も相関が低かったのは大勢の人の前でのスピーチ場面であった ( $r = .227$ )。低い正の相関が確認された。また、CA 総計および各下位尺度のすべてにおいて 1% 水準で有意 (両側) であることが確認された ( $p < .01$ )。

女性の CA の下位尺度とシャイネスとの間には、明らかにコミュニケーション場面における対象者数よりも、むしろそこに期待されるコミュニケーションの密度の濃さが関係している傾向のうかがえるものとなっている (Figure 7 参照)。シャイな傾向のある人は、個人対個人がお互いに関与し合いながら関係性を構築していくような密度の濃いコミュニケーションの展開が期待される場面であればあるほど不安感を持ち、しり込みをしてしまう傾向があると考えられる。

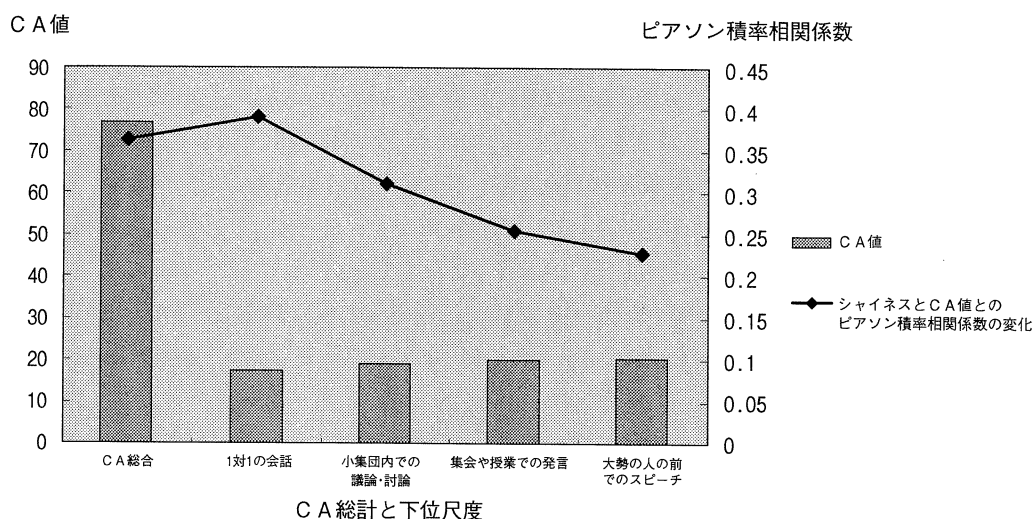


Figure 7. シャイネスと各 CA 値との相関変化 (女性)

最後に、男性・女性・男女総計の3データを1つのグラフにまとめてみた (Figure 8)。CA 値に関しては、男性・女性ともにグラフ上 (棒グラフ)、大きなばらつきは見られないが、シャイネスと CA 値との相関 (折線グラフ) については、明らかにその形状に違いが確認できる。男女総計の全データと女性データの示すグラフの形状はきわめて類似した形をとっているが、男性データのグラフは明らかにそれらとは違う動きを示している。こうした違いが生じた原因として、男性データ数と女性データ数の数の違いはもちろんであるが、男性と女性の焦点の当てる自己意識 (公的自己意識・私的自己意識) の違いが影響しているものと考えられる。この点については、シャイネスと自己意識の相関を測定することにより、今後検証を進めていきたい。

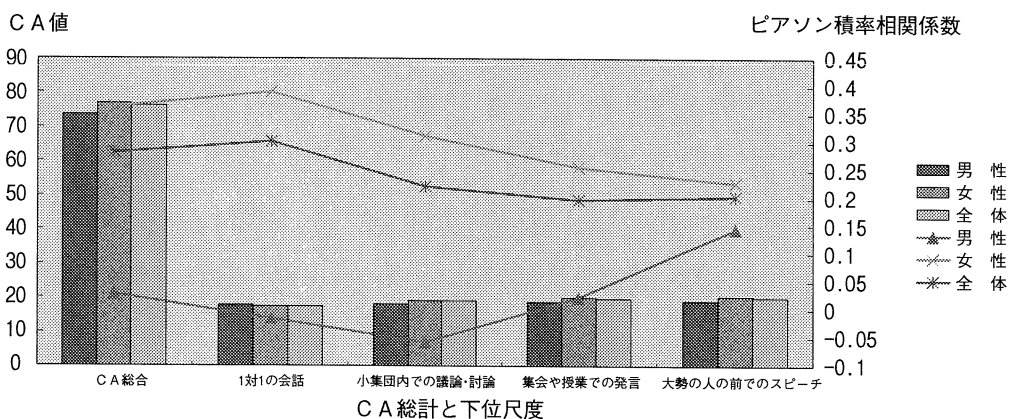


Figure 8. シャイネスと各 CA 値との相関変化 (全データ)

## 6. 結論および今後の研究課題

本研究では、CA とシャイネスとの関係性を検証することを目的とし、質問紙により量的データを収集し、分析を加えたものである。CA の調査には、PRCA-24 を用いた。これまでの先行研究と同様、全体的に高値の CA が示され、日本人の対人コミュニケーション場面に對する不安感や懸念の程度の高さを再認識させられる数値が示された。また、シャイネスについては日本語版シャイネス尺度（今井と押見、1987）を用いた。本調査においても今井と押見（1987）と極めて近い数値が得られ、尺度の適切性と信憑性の高さが再確認されるものであった。シャイネスに関しては、女性よりも男性の方が高い数値を示したが、両者の間に有意な差は確認されなかった ( $n.s., p > .05$ )。これは Zimbardo (1977) の指摘を支持するものであった。本稿では、こうした結果をもとに双方の相関関係に論点をおき議論した。

その結果、CA とシャイネスとの間には弱い正の相関が認められた。また、その相関は有意であることが確認された ( $p < .01$ )。性差の観点から両者を見てみると、男性データは CA のすべての範疇（CA 総計、CA 下位尺度）においてシャイネスとは無相関を示したが、逆に女性データはすべての範疇において弱い正の相関が確認され、それらはすべて有意であった ( $p < .01$ )。

また、シャイな傾向のある人は、コミュニケーション場面における対象者数よりも、むしろそこに期待されるコミュニケーションの密度の濃さに影響される傾向がうかがえた。つまり、シャイな人は、個人対個人がお互いに関与し合いながら関係性を構築していくような密度の濃いコミュニケーションの展開が期待される場面であればあるほど不安感を持ち、しり込みをしてしまう傾向が見られた。しかし、このパターンは女性には当てはまるものであったが、男性には当てはまらなかった。その原因として、男性と女性の自己意識の違いに原因を求めた。今井と押見（1987）は、シャイネス尺度と自己意識との相関を測定しているが、公的自己意識とは弱い相関が示されたが私的自己意識とは無相関であったことを報告している。今回得られた結果と今井と押見（1987）のこうした報告を重ね併せて考えてみると、多分に自己意識との関係性がこうした結果に影響を及ぼしているものと推測されるが、この点については今後の研究課題としたい。

付記 本項は、2005 年度学園研究助成金 B を利用させていただき、その研究成果としてまとめたものである。学園関係者には、この場を借りて深く御礼を申し上げる次第である。

## 引用文献

（英文文献はアルファベット順、邦文文献は五十音順に別立てにて表記）

〔英文文献〕

Andersen, P., A., Andersen, J., F., & Garrison, J., P. (1978). Singing apprehension and talking

- apprehension: The development of two constructs. *Sign Language Studies*, 19, 155-186
- Cheek, J. M. & Buss, A. H. (1981). Shyness and Sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, (2), 330-339.
- Daly, J. A. & Miller, M. D. (1975). The empirical development of an instrument to measure writing apprehension. *Research in the Teaching English*, 9, 242-249
- Jones, W. H., Briggs, S. R., & Cheek, J. M. (Eds.). (1986). *Shyness: Perspectives on research and treatment*. New York: Plenum.
- Jones, W. H. & Russell, W. D. (1982). The social reticence scale: A measurement of shyness. *Journal of Personality Assessment*, 46, 629-631
- Klopf, D. W. (1997). Cross-cultural apprehension research: Procedures and comparisons. (pp. 269-284). In Daly, J. A., McCroskey, J. C., Ayres, J., Hopf, T., and Ayres, D. M. (Eds.). *Avoiding Communication—Shyness, Reticence, and Communication Apprehension—2<sup>nd</sup> Edition* Hampton Press, INC. Cresskill, New Jersey.
- Klopf, D. W. & Cambra, R. E. (1979). Communication apprehension among college students in America, Australia, Japan, and Korea. *Journal of Psychology*, 102, 27-31.
- Leary, M. R. (1983). *Understanding Social Anxiety —Social, Personality and Clinical Perspectives—*. Beverly Hills, CA: Sage.
- McCroskey, J. C. (1970). Measures of communication-bound anxiety. *Speech Monographs*, 37, (4), 269-277
- McCroskey, J. C., Gudykunst, W. B., & Nishida, T. (1985). Communication apprehension among Japanese students in native and second language. *Communication Research Reports*, 2, 11-15.
- McCroskey, J. C. & Richmond, V. P. (1982). Communication apprehension and shyness: Conceptual and operational distinctions. *Central States Speech Journal*, 33, (3), 458-468
- McCroskey, J. C. (1997a). Willingness to communicate, Communication Apprehension, and Self-Perceived Communication Competence: Conceptualizations and Perspectives. (pp. 75-108). In Daly, J. A., McCroskey, J. C., Ayres, J., Hopf, T., and Ayres, D. M. (Eds.). *Avoiding Communication—Shyness, Reticence, and Communication Apprehension—2<sup>nd</sup> Edition* Hampton Press, INC. Cresskill, New Jersey.
- McCroskey, J. C. (1997b). Self-report measurement. (pp.191-216). In Daly, J. A., McCroskey, J. C., Ayres, J., Hopf, T., and Ayres, D. M. (Eds.). *Avoiding Communication—Shyness, Reticence, and Communication Apprehension—2<sup>nd</sup> Edition* Hampton Press, INC. Cresskill, New Jersey.
- Richmond, V. P. & McCroskey, J. C. (1998). *Communication Apprehension, Avoidance, and Effectiveness*. 5<sup>th</sup> edition. MA: Allyn & Bacon
- Watson, D. & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 448-451.
- Zimbardo, P. G. (1977). Part 1 Understanding Shyness. (pp. 10-21) *Shyness: What it is, what to do about it*. Massachusetts: Perseus Books.

#### [邦文文献]

- 相川充 (1991) 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 『心理学研究』 62、(3)、149-155.
- 今井明雄・押見輝男 (1987) シャイネス尺度の検討 『日本社会心理学会 第28回大会発表論文集』 p. 66.
- 押見輝男 (1999) 3. 自分に注意を向けやすい性格 (pp. 49-69.) 『自分を見つめる自分—自己フォーカスの社会心理学—』 サイエンス社
- 笠原正秀 (2006) コミュニケーション不安と自己意識との関係性について 『椋山女学園大学研究論集』 37

社会科学編、137-152.

近藤真治・ヤン・インリン (1996) 第1章 コミュニケーション不安とは何か (pp. 8-18) 『コミュニケーション不安の形成と治療』ナカニシヤ出版

坂本正裕・チャールズ プリブル・ジェームズ キートン (1998) コミュニケーション回避研究の歴史と現状 『心理学研究』68、(6)、491-507.

菅原健介 (2002) 第4章 対人不安 (pp. 78-99) 大淵憲一・堀毛一也編 対人行動学研究シリーズ5 『パーソナリティと対人行動』誠信書房

豊川輝 (1992) スピーチ不安に及ぼす自己教示の効果 『行動療法研究』18 11-21.

西田司 (1988) 日本人大学生のコミュニケーション不安 『日本大学国際関係研究』第8巻第3号 pp. 171-183.

パス A., H. [大淵憲一監訳] (1997) 第7章 傷つきやすい心—対人不安— (pp. 189-217) 『対人行動とパーソナリティ』北大路書房

リアリイ、M., R. [生和秀敏監訳] (1998) 『対人不安』北大路書房

注

- \* 国際言語コミュニケーション学科 (異文化・対人コミュニケーション研究)
- 1 PRCA-24 は、CA を特性としてとらえ測定できるように作成されたものである。McCroskey (1970, 1978, 1982) により何度も改訂され、最終的に現在の 24 項目の質問形式になった。非常に高い内的整合性を持っており、各調査で示される数値も長年にわたり一定の数値を示している。このことは CA の特性という側面を裏付けているばかりでなく、その信憑性の高さを証明するものでもある。
- 2 例えば、代表的なものには、人前で歌うことに対する不安を測定するものとして Test of Singing Apprehension: TOSA、人前で字を書くことに対する不安を測定するものとして Writing Apprehension Test: WAT 等があげられる。
- 3 PRCA の内的整合性 (男女総計)

PRCA		1	2	3	4	5
1. 小集団	Pearson の相関係数		.222**	.197**	.204**	.282**
	有意確率 (両側)	—	.000	.000	.000	.000
	N		550	550	550	550
2. 集会	Pearson の相関係数			.716**	.515**	.512**
	有意確率 (両側)		—	.000	.000	.000
	N			550	550	550
3. 会話	Pearson の相関係数				.304**	.687**
	有意確率 (両側)			—	.000	.000
	N				550	550
4. スピーチ	Pearson の相関係数					.798**
	有意確率 (両側)				—	.000
	N					550
5. 合計	Pearson の相関係数					
	有意確率 (両側)					—
	N					

(\*\* $p < .01$ )

- 4 大学生 ( $N=225$ ) を対象とした調査において、男女総計  $M=75.24$  ( $SD=15.37$ )、男性:  $M=76.48$  ( $SD=15.52$ )、女性:  $M=74.00$  ( $SD=15.05$ ) という数値を示している (今井と押見、1987)。
- 5 各項目得点とその項目以外の合計得点との相関は、項目 26 に関しては相関が低かったが、それ以外の

25項目で求めた $\alpha$ 係数は $\alpha = .912$ であり、再テスト法での信頼性係数は.899が示されている。また、項目26を除いた25項目による主因子法バリマックス回転を行った結果、6因子が抽出され（固有値1.0以上）、ほぼ全項目に第1因子（固有値8.38、寄与率33.5）が含まれているという結果が示されていた。また、他のパーソナリティ尺度との相関については、自己意識尺度の社会的不安とは高い正の相関が示されている（ $r = .87$ ）。また、MPI-N尺度とは $r = .25$ 、自己意識尺度の公的自己意識とは $r = .16$ で有意な正の相関が示されている。MPI-E尺度とは $r = -.76$ 、セルフ・モニタリングとは $r = -.51$ 、自尊心尺度とは $r = -.36$ という高い負の相関が示されている。自己意識尺度の私的自己意識との相関は見られなかったと報告している（注4も併せて参照のこと）。

6 本研究では、2変数間の関連性や共変関係を調べるためピアソン積率相関係数（ $r$ ）を用いた。

7 各下位尺度において算出される数値は、最低6から最高30となる（McCroskey, 1997b）。